

G-11 被服教育における人体教育について提案する

日本シルエッター・研

○阿部芳子 長堀茲子

目的 今日衣生活は急速に多様化し、その中でいかに着用する人間にマッチしたものをづくり、又組合せを楽しむかというところまできている。一方社会における衣服づくりは、立体裁断方式やカメラ測定による採寸、コンピューター裁断など、今までの平面的解釈では考えられない方式が開発されている。このような社会情勢に対し、被服教育の現状は、従来ハウリの平面作図にはじまる裁断縫製の方法によっているものがほとんどである。衣服は人体を土台として、個々の人間が着用し、人間生活を営むものであるのに、これまで被服教育の中ほどの程度人体と結びつけて教育されてきたであろうか。「衣服をつくり、衣服をえらぶことの基盤に人間生活があり、人体教育をぬきにして被服教育はあり得ない」ことの認識と理解を深めることを目的とする。

方法 今日の衣服づくりの基本になつてきている体形観察の代表的な方法とそれの観点をあげ、これらの方法を用いて作られた日本人の基本ダミーをもとにパターンづくりのあり方を説明し、また、素材やデザインを異にする衣服を着用させての人体と衣服との適合性をみる。さらに動作との関係をも調査、着こなしのための、動、人体教育として、ファッションショーや、街頭調査などに発展する。衣服をつける人間自身の静的、動的状態を知つていれば、衣生活をいかにようにも変化させることが可能である。又よりよい消費生活に役立つための、サイズに対する認識も、人体教育が中心にならなければならぬことを合わせて提案するものである。